

2020年

ミラ型極大・極小予報 (No. 33)

広 沢 憲 治

1 はじめに

2020年のミラ型予報は、従来と形式を変更した。極小予報を計算するようになったことから、極大期・極小期を把握しやすくして、観測の効率化に資することを願っての変更である。

今回極大予報を計算できた星は、2019年より大幅に増加して715星となった。また、極小予報についても昨年より大幅に数を増やして247星になった。これまであまり観測されていなかった星にチャレンジしていただいた方々のおかげであり感謝を申し上げます。しかし、まだ極小予報が計算できない星も多いことや、明るい星でも相変わらず観測が少なく予報の精度が不十分なものも多いなど、課題も多いので、さらに多くの方に観測していただくようお願いする。

なお、ミラ型変光星は、突然大きく予報から外れる場合もあるので、どの星についても観測が必要であることを念のため申し添えておく。

2 最近の傾向

CCDやデジタルカメラ等による観測は、さらに充実の度を増している。ミラ型の観測においても、眼視観測よりもCCDやデジタルカメラでの観測結果の方が多数を占めるようになってきた。今後は互いの長所を生かすことで、より詳細に個々の星の動向が把握できることを期待している。

この予報について、明らかな間違いなどお気づきのことがあった場合は、広沢までお知らせいただけるとありがたい。より信頼性の高い予報となるよう、ご協力をお願いする。

3 表の見方について

(1) No. 通し番号

月別の並び替えなどを行った時、元の順に戻すために利用できる。

(2) C 予報の精度

[#] ----- 観測数の不足等により精度がよくないと考えられるものや、観測のための「めど」としての数字に過ぎないもの。

[\$] ----- SR型の星。実際の変化とはかなりの違いがあることも考えられるので注意してほしい。

(3) Name 星の名前

(4) P 周期

主にASASの周期を採用した。ASASによる周期は最近の観測によって求められているので、実際の傾向を良く反映している。ただし、GCVSなどに記載された周期のように、長期間の観測・研究に基づいたものではないため、集計や研究にはどの周期を採用するか吟味が必要である。

(5) Range 変光範囲 (極大、極小光度)

今回から、原則としてV等級の変光範囲に統一した。GCVS等ではV等級の変光範囲が記載されていない星もあるので、そのような場合はASASによる数値を採用した。そのため、これまでのように過去最も明るかった(暗かった)極大(極小)光度にはなっていないので、この範囲を超えて明るく(暗く)なる場合があると予想される。